映画の情熱 小金井から

社会派監督が拠点事務所

あす 自作上映会

被差別部落など社会的に難しいテーマを取り上げたドキュメンタリーで注目を集める映画監督の纐纈(はなぶさ)あやさん(39)が、作品の自主上映会などを扱う映画会社を地元・小金井市に設立した。4日には、最新作の上映会を地元で初めて開き、映画への思いを語る。

纐纈さんは2010年、瀬戸内海に浮かぶ山口県・祝島で原発建設に反対する住民を追った「祝(ほうり)の島」で監督デビュー。13年には、2作目「ある精肉店のはなし」で、肉牛を育て、食肉処理して販売する精肉店の家族を描いた。ドイツや韓国、日本の映画祭に出品され、観客賞を受賞するなど高い評価を得た。

「映画をやろうなんて思ったこともなかった」という纐纈さん。3歳の時から、30歳前後の一時期を除いて同市在住。映画と無縁の生活を歩んでいたが、パン屋でバイトをしていた26歳の時、親友の紹介で都内の映画会社で働くことになった。映画の配給・宣伝などを担当した後、同社で映画プロデューサーを経験。「撮られる人の人生や地域にまで思い切り踏み込む映画の重さ」を実感したが、多忙さに疲れ、5年で退社した。

その1年後。映画館で柿農家の暮らしを追ったドキュメンタリーを見て、「特別な才能や技術がなくても、被写体との信頼関係さえ築ければ、自分しか見えない映像を切り取れる」と感じた。作品のエンドロールが流れている間に決意が固まった。

1週間後から祝島に通い、島民の生活を丹念に追った。2作目は、大阪で肉牛の飼育やと畜を行う精肉店の家族を描いたが、生き物の死や被差別部落を扱う難しいテーマで、関係者の了解を得るのは簡単ではなかった。

部落解放同盟の幹部から「どこまで覚悟を持っているのか」と問われ、「覚悟があるなんて簡単には言えないが、何があっても逃げません」とぶつけた。店近くに借りた部屋に1年半住み、関係を築きながら撮影した。

地元に根づいた人々を追う中、「自分はどうなのか」と振り返った。小金井市で映画制作に携わる市民らとの出会いもあり、今年4月、同市梶野町に「やしほ映画社」の事務所を構えた。各地で開かれる自主上映会に、作品を有料で貸し出す窓口などを担っており、「今後は映画を通じ、地元とつながる取り組みができたら」と意欲を燃やす。

4日は午前10時、午後2時、同7時の計3回、小金井市民交流センター(本町6)で「ある精肉店のはなし」を上映。各回とも纐纈さんのトークがある。料金は一般1500円など。問い合わせは同社(0422・38・6424)。

上映画の魅力について語る纐纈さん(小金井市で)　下映画「ある精肉店のはなし」のワンシーン。精肉店の店主が食肉を処理している(やしほ映画社提供)